

平成30年 5月15日

若手研究者海外挑戦プログラム報告書

独立行政法人 日本学術振興会 理事長 殿

受付番号 201780286

氏名 齊藤 俊樹

(氏名は必ず自署すること)

若手研究者海外挑戦プログラムによる派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。
なお、下記記載の内容については相違ありません。

記

1. 派遣先：都市名 オックスフォード (国名 アメリカ)
2. 研究課題名（和文）：視線操作が社会的カテゴリーの選好に与える影響
3. 派遣期間：平成29年10月24日 ～ 平成30年4月22日 (181日間)
4. 受入機関名・部局名：マイアミ大学 心理学部
5. 派遣先で従事した研究内容と研究状況 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

申請者は、派遣先において自身の感情状態や相手の視線、表情などがどのように心の帰属に影響するのかについて検討した。

他者に対して心の存在を認めることは心の帰属といい、他者への共感や、援助行動の前提となる。他者に心の存在を認めない場合、その他者に対する共感の欠如、非人間的な扱いや差別につながる。他者の性格や感情状態などを推測する際、表情は有用な手がかりであるが、表情と心の帰属の関係については明らかにされていない。これまで、他者が発する接近一回避のシグナル、他者の魅力度が心の帰属に影響することが分かっている。そこで、表情が発する接近一回避のシグナル、表情の違いによる魅力の増減という表情の持つ二つの側面に注目し、表情と心の帰属の関係を検討した。

合計で5つの実験を行った。実験1では、笑顔表情を表出している他者に対して心が帰属されやすいこと、実験2・3では、この現象が人種・表情の自然さを超えて確認できることを明らかにした。続く2つの実験により、この現象の背景にあるメカニズムを調べた。その結果、笑顔による心の帰属の促進は、笑顔による魅力の増加ではなく、笑顔が発する社会的受容のシグナルが原因であることが明らかとなった。本研究は表情と心の帰属を明らかにした世界初の研究であり、心の帰属の理論的発展の一助となると考えられる。

6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性 (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

派遣先で得た成果は、2018年9月の日本認知心理学会、および年2月にアメリカのポートランドで開催される社会心理学の国際学会 (Society for Personality and Social Psychology) で発表予定である。また現在、指導教員である Kurt Hugenberg 博士指導のもと論文執筆中であり、今年度中に心理学の分野で権威のある国際誌、Emotion 誌に投稿予定である。

今後は、派遣先で得た成果をもとに、本国で心の帰属研究を発展させる研究を行う。具体的には、MRI 装置を用い、心の帰属の神経基盤を明らかにする、また、若者から高齢者までを対象とし年齢の違いが心の帰属に与える影響を明らかにする研究を行う。これらの研究を行うため、心の帰属尺度の日本語版を作成し、心の帰属研究を日本で行えるようにする予定である。

7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと (1/2 ページ程度を目安に記入すること)

本プログラムに採用されたことで得られたことは数えきれないほどある。その中でも特に重要なものは、米国における研究方法の学習・理想となる研究者像の確立・英語力の向上の3点である。

米国における研究方法の学習 海外での初めての研究生活で、日本との違いを多く経験したが、その中で最も印象的だったのは研究のスピードだった。倫理委員会の承認は一週間もあれば受けることができ、何十人、何百人というデータが数日の内に集まっていた。このように、研究アイデアから実験結果を纏め論文にするまでのスピードがとても速く、その速さには舌を巻いた。このスピードを可能にするのは、院生に代わって実験を行うリサーチアシスタントの存在に依るところが大きいと思うが、効率的に研究を行うシステムを知り、体験できたことはとても勉強になった。また、チームで研究を行う姿勢も印象的だった。研究室の枠を超えて、研究テーマごとのチームを作っていた。そして、日頃から研究内容や研究の進捗状況について話し合い、協力して作業をしていた。この円滑なチームワークによって質の高い、独創的な研究を生み出していた。研究のスピードやチームワークは、実際に研究室に滞在しないと分からないことだったため、非常に大きな学びとなった。

理想となる研究者像の確立 指導教員である Kurt Hugenberg 教授は、優れた研究者であると同時に優れた教育者であった。研究テーマについての豊富な知識を持ち、的確なアドバイスをしてくれた。何より、とても温かい人柄で、申請者が彼の研究室に訪問する度に笑顔で出迎えてくれ、研究の進捗を目を輝かせて聞いてくれたことはとても励みになった。Kurt Hugenberg 教授に指導を受けることができたことにより、研究者のロールモデルを新たに得ることができた。これにより、理想となる研究者像がより豊かなものになり、この理想像に近づけるよう努力したいと思った。

英語力の向上 滞在中、研究室の同僚とのコミュニケーションや、英語の授業に出席したことにより英語力が格段に上昇した。滞在前、英語圏で生活すれば自然に流暢になると考えていた英語だが、生活するだけでは身につかないことを痛感した。運の良いことに、学内の英語の授業に出席する機会や私の英語にめげずにコミュニケーションをとってくれる同僚に恵まれたため、英語を上達させることができた。

以上のように、本プログラムに採用されたことで日本にいただけでは得ることのできない多くのことを得ることができた。